レドモ、孝養ノ心ハ實ニアリガタケレバ、可然三寶ノ御メグミニヤ、母ヲ養ホドノ食物ニアタリケルコソ、返々モ不思議ニ覺侍シ、孝養ノ志シマコトアルユヱニ、冥ノ御哀モアリケメ、

〔謠曲〕望月

狂　是成人達はいかなる人にて候ぞ、シテさむ候、是は此宿〇近江守山に候めくらごせにて候、加樣の御旅人の御著の時は、罷出て謠ひなどを申候、御前にてそと御うたはせ候へ、〇略中　女　一万箱王が親のかたきをうつたる所を謠ひ候べし、〇略中夫かれうびんはかいこの内にして聲諸鳥にすぐれ、玄といふ鳥はちいさけれ共、虎を害する力あり、爰に河津の三郎が子に、一万箱王とて、兄弟の人の有けるが、同五つやみつの比かとよ、父をいとこに討せつゝ、既に日行時來つて七つ五つに成しかば、いとけなかりし心にも父の敵をうたばやと、思ひの色に出るこそ實哀にはおぼゆれ、〇略下

〔七十一番歌合中〕二十五番　右　女盲

ね覺してあな面白といふ聲に月さゆるよを空にしる哉

月影のさゆるも玄らずめくらきは秋の物うき涙なりけり

左は目のみえぬ事をよせいにてよめり、右はめくらきとよせたる心ばせ、ともにあはれにきこゆ、可爲持、

吹風のめにみぬ人の戀しきを軒ばにおふるまつときかせよ

いかにしてさのみたつ名を大鼓かしらうつまで戀しかるらん

左は古歌の詞あまりにながく聞ゆれど、歌がらあしからぬにや、右は大つゞみにかしらうつといふこと侍にや、されどいやしく聞ゆれば、まけ侍べし、

〔嬉遊笑覽六上音曲〕盲女は、甘露寺職人歌合に、琵琶法師と女盲と番ひたり、其繪、髮をさげ眉作りた